

だけど!いいんだ・・・エロいのも全部、私なんだ!

FULLCOLOR

成人向


ムチムチドリーム6

# 続淫乱執務官・裏日記

ムチムチ7

Muchi Muchi Seven





その日、私は油断をしていました  
追跡をしていた人物に捕らわれてしまった私は  
ビームで拘束され、  
あられもない姿にさせられました

その瞬間から『声』が聞こえてきました  
『アムンハイム執務官』



私は両手をビームで拘束された上で、  
両足も持ち上げられて恥かしい格好で晒されました。  
大きく両足を開かされ、大切な部分まで  
丸見えにさせられました

ドキ

ドキ

グ  
グ  
グ

そんな……

ガ  
ム  
ア



『さあ それでは楽しませていただきますよ』  
聞き覚えのある声の合図と共に  
どこからか粘液で薄汚れた触手があらわれて  
私の肉体にまとわりつき始めました

クワッ

ジュッ

ニユル

ヌヌン

ニユル

じゅっ ぐっ……

『くくく……いり格好ですよ……執務官殿』







ビームに動きを封じられた私の肉体を  
触手は我が物顔に動き回り  
的確に私の急所を攻め続けます  
胸にまとわりつき、穴の奥へ奥へと責め入り  
私の肉体を翻弄します

うう… ダメ…  
これ以上は…

アッ  
アッ

アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

薄れ行く意識の中で私は最後の手段に出ました  
「真ソニックフォーム モードリリース」



私は戒めを解き、再び敵を追跡しはじめました  
『さすがですね、しかし状況は全く変わらないのですよ』  
『どういう意味?』

エリオ…  
なぜ…?

その時、私の疑問に答えるように  
目の前に囚われた人物があらわれました  
「エリオ……!」

ビクッ

ビクッ



再び捕まった私はエリオと対面させられました

『くくく・・・感動の御対面はいかがですか？』

『おやおや 彼はあなたの姿を見て興奮してしまっただようですよ？』

ごめんなさい  
フェイトさん

大丈夫だよ・・・  
エリオ

ドキッ

ドキッ

ハッ

ハッ

パルン

ビク

ビク

エリオのモノは私を見て硬く大きくなり  
その先端からは半透明な液体が溢れていました  
『さあ 彼のモノをあなたが慰めてあげてください』



両手を拘束されたままエリオの前にひざまづかされた私は  
彼のモノを口に含み慰め始めました

「フェイトさん……」

「大丈夫だよ、エリオ……」

んっ

んっ

んっ

ちゅん、

ちゅん、

グググ

グググ

そう言っつと、私は愛しい人の熱い肉棒を  
丁寧にしゃぶり続けます  
私の回の中で彼のモノがどんどん固く  
大きくなっていくのがわかります



『それではお待ちかね  
いよいよ 坊やが美しい執務官の肉体を  
味わえますよ』

私はその恥かしい格好のまま持ち上げられて  
エリオの上まで運ばれました

「ダメ・・・そんな・・・こんな格好で」  
「フェイトさん・・・」

『くくく 感謝して欲しい位ですよ お二人の仲を取り持つのですから』  
『さあ、それでは本番と行きましょっか』  
私は覚悟を決めました

ドキッ

ドキッ

くぽあっ

ビクッ

ビクッ

ハアッ

ハアッ



持ち上げられていた私の肉体が徐々にエリオの上へ降りし始められました

「ああっ！」

「ううっ」

一つになり始めた私たちがうめき声をあげます

私の体は容赦なく降りされていき、エリオのモノは

ズブズブと私の中へ入って行きました

「アッ」

「アッ」

「アッ」

「アッ」

「ズッ」

「ビクッ」

フェイトさん…

大丈夫：  
大丈夫だよ エリオ

『そおら 見事に根元まで入りましたよ』

私たちは初めて自分たちの意思に反して

一つに繋がりました







戒めを解かれたエリオが私を犯します

「エリオ、いいよ もっとしても・・・」

「フェイトさん フェイトさん！」

「ふふふ 彼はすっかり肉欲の虜のようですね」

エリオ！ いいよ  
もっと奥まで！  
もっと激しく！

「言い忘れていましたがこの場所は特殊空間になってしまっていてね  
性行為で絶頂に達するとあなた方のリンカーコアから魔力を  
吸収する仕組みになっているんですよ」  
そんな言葉もセックスの虜となった私たちには  
もはや届きませんでした







それから毎日セックス漬けでした 男たちがかわるがわる私を犯します  
私の肌が精液を浴びない日、私の穴が精液で満たされない日はありません

うう…たまんねえな

『ふむ、これだけの男をあてがっているというのに

あまり効率がよくありませんね…

やはり彼に手伝ってもらった方が良いですか…』

意識も朦朧としていた私が連れて行かれた先にはエリオが待っていました。

私はもっとも求めていた物を与えられました

こいつの穴は  
最高だぜ！



エリオと私は一日中、繋がっていました

彼の肉棒は奥まで入ってきて私を喜ばせてくれます

私の肉壺も彼を絞めつけオスのエキスを搾り取ります

『ふふふ・・・やはり彼を改造して正解だったようですね』

肉体を改造されたエリオの精力は尽きる事はありませんでした

いいよ エリオ・・・  
好きなだけ・・・  
何回でも出していいんだよ

私たちは全てを忘れてお互いを貪っていました  
そうした毎日が続けている私たちは魔力も体力も尽きようとしていました  
それでも私は彼以外には何もいりませんでした  
『くっくっく やはり彼との相性は最高だったようですね』  
『他の男どもを全て合わせたより効率が良いとは素晴らしい！』  
そんな『声』も私たちの耳にはもう届きませんでした

うう・・・  
また出ます・・・



## <奥付>

ムチムチドリーム6 「続淫乱執務官・裏日記」  
発行 ムチムチ7(通巻 41号)  
原案 火神 ダン  
作画 猫丸  
発行日 西暦2012年 8月12日  
URL <http://www.marimo.sakura.ne.jp/~muchi7/>  
連絡先 〒160-0023  
東京都新宿区西新宿7-3-10  
山京ビル5F 198号ムチムチ7

この本の無断転載・無断複製を禁じます。  
乱丁・落丁はトライデントスマッシャーにて抹消  
無断転載した場合はプラズマザンバーブレイカーにて滅殺！

### ●オークションの件について

当サークルはオークションに関しては一切関知致しません。当サークルの作品をオークションに出品する事も落札する事も、特に禁止しませんが、オークションの件に関して問題があった場合、質問をされても当方でお答えは出来ません。

### ●海賊版・インターネット内の配布について

当サークルの作品を当方の許可なく、海賊版の作成及び売買、またはスキャナー等で画像の取り込みなどをしてインターネット内で不特定の人物に配布する事、コピー製品のオークションを固く禁じます。





んん... ぬ...  
じははは...



その手は私の女の部分をさわっていいのよ  
激しく出入りしていいわ  
「はっ...」  
私がおっぱいをさわっていいのよ  
静かな部屋の中心に私の体を動かしていいのよ  
触手のヌメヌメ...



「ふむ、これだけの男をあてがっているというのに  
あまり効率がよくありませんね...  
やはり彼に手伝わってもらった方がいいですか...」  
意識も朦朧としていた私が連れて行かれた先にはエリオが待っていました。  
私のもっとも求めていた物を与えられました。



あは...おいしい...

それから毎日セックス漬けでした。男たちがわかるがわる私を犯します  
私の肌が精液を浴びない日、私の穴が精液で満たされない日はありません

うっ... たまんねえな



「さあ、それでは楽しんでみてくださいね。さあ、  
聞き覚えのある声の合図と共に  
どこからか粘液で濡れた触手があらわれて  
私の肉体にまとわりつき始めました」

うっ... ぐう...



その飢えた男たちが私の体を犯します  
男たちの凶暴な肉棒は私の体内で暴れ回り奥まで突き刺さります  
私の肉壁が悲鳴をあげて侵入してきたチンポを締め上げると  
男たちはケモノの様な声をあげて私の中に精液を注ぎこみました  
飽きることもなく何度でも...

精力尽きるまで私とセックスして意識を失ったエリオが別室に運ばれ  
「流石ですね、貴女はまだ余裕を残していらっしやるようです」  
「それでは彼らにも活躍してもらいましょうか」  
その「声」ともどこからか出て来た男達が私を取り囲みま

チンポ...  
男の人の...チンポ...



んん... ぬ...

「さあ、それでは楽しんでみてくださいね。さあ、  
聞き覚えのある声の合図と共に  
どこからか粘液で濡れた触手があらわれて  
私の肉体にまとわりつき始めました」



んん... ぬ...



んん... ぬ...  
おっぱいは...  
おっぱいは...

「さあ、それでは楽しんでみてくださいね。さあ、  
聞き覚えのある声の合図と共に  
どこからか粘液で濡れた触手があらわれて  
私の肉体にまとわりつき始めました」



「さあ、美しいお嬢さん、貴女が動いてあげなければダメですよ」  
その声に導かれるように私が肉を上下に動かし始めます  
エリオの嬉しいニスが私の中に入り始めます  
「エリオ、おっ、エリオ」  
「うっ... フォネイトさん...」  
思わず私が口走ります  
「さあ、エリオさん、おっ、おっ」

エリオ  
今からもっと気持ちよく  
してあげるからね



大丈夫だよ...  
エリオ

エリオのモノは私を見て硬く大きくなり  
その先端からは半透明な液体が溢れていき  
「さあ、彼のモノをあなたが慰めてあげて

ごめんなさい  
フエイトさん